古版『用文章』再考
―近世前期江戸出版における〈江戸〉意識の萌芽（1）―

母利司朗

はじめに

近世前期に江戸の本屋から出版されたいわゆる「江戸版」については、京都や大坂の本屋から出版された「上方版」とは異なった様式に関心が向けられ、近年多くの研究が発表されている。なかでも、柏崎順子氏による、「江戸版考」[1]、「江戸版考　其二」[2]をはじめとする一連の研究は、学界における江戸版についての知見を従来より格段に増加させた。

筆者もまた、「近世前期江戸版の本文版下」[3]、「江戸版御伽草子の本文―近世前期における江戸版本文の特性（1）―」[4]他、一連の論を発表し、江戸版独自の特徴とされる書風・字体を生んだ版下の問題や、江戸版本文の特性など、主に版下作成に関わる諸問題についての研究をおこなってきた。

両者の成果をあわせると、江戸版については、およそ次のようなことが明らかになったといえる。最も重要なことは、柏崎氏が明らかにされたように、近世前期、江戸の本屋と上方の本屋の間での提携関係が想像以上に強かったこと、であろう。それによって、従来の「海賊版」云々といった江戸版にたいする評価に再検討が必要となったことは言うまでもない。また、従来江戸版の独自性として強調されてきた書風が、基本的には当時の標準書流であった御家流の範疇におさまる可能性が高いこと、あるいは、江戸版の本文が上方版に比べても意外なほどに良好な本文を備えていること、なども明らかになった。これらは一つ目の上方の本屋との連携のありかたとも関わっている可能性が高い。

しかし、以上のことを差し引いても、やはり近世前期の江戸出版物のある種のものからは、上方版にない「独特」の雰囲気がうかがえることは否定できない。上方と江戸の本屋の連携が予想以上に大きければ大きいだけ、では、江戸の本屋が「江戸」を意識しはじめたのはいつころからなのか、「江戸」らしさはどこからもたらされたのか、という問題が浮かび上がってくる。

本稿では、この問題を考えていく手始めとして、『〈江戸〉新用文章』という往来物版本をとりあげ、その実態を解明してみたい。

一　『〈江戸〉新用文章』とは何か

本稿でとりあげる『〈江戸〉新用文章』の書誌を記す（以下、架蔵本①、と呼ぶ。**図1・図2・図3・図4**）。

［書型］大本、上巻一冊。縦二十六・七×横一八・一糎。［表紙］縹色　卍繋地牡丹紋様。［題簽］原簽。表紙左肩に「江戸（角書）新用文章　上」。［内題］「新板用文障　上」。［柱刻］「用文　上一（～廿四終）」。［丁数］二十四丁。［刊記］「明暦三年松曾開板」。裏表紙見返しに、「寛文拾年　斎藤□四良（花押）」と墨書きあり。

本書については、筆者は、すでに「『用文章』古版考―近世初期往来物拾遺（1）―」[5]（以下、「旧稿」と呼ぶ）という論の中で、架蔵本①と、その元になったのではないかと思われる版本との書誌的な比較考察をおこなった。また、そもそもこの『用文章』というものが、近世出版史上、どのような意味をもつのか、についても、当時見ることのできた資料の範囲で可能なかぎりのことを考えてみた。

本稿においては、その後あらたに出現した資料を加えながら、あらためて本書をとりあげ、上方版と江戸版の問題の俎上にもう一度これを載せてみようと考える。「古版『用文章』再考」と題したゆえんである。論の都合上、旧稿と重なる部分の出てくることを諒とせられたい。

なお、旧稿発表以後、小泉吉永氏がもう一本を所蔵されていることがわかった（以下、小泉本①、と呼ぶ。）。

［書型］大本、上巻一冊。縦二十六・四×横一八・四糎。［表紙］縹色。表紙模様不明。［題簽］なし。［内題］「新板用文障　上」。［柱刻］「用文　上一（～廿四終）」。［丁数］二十四丁。［刊記］「明暦三年松曾開板」。オモテ表紙見返しの紙がはがれた所に、「酉年／延宝九／二月十八日」、見返し紙裏側に「新用文章」、ウラ表紙見返し紙の余白に、「江戸下谷広徳寺内／円照院中　宗聯／新用文章／延宝九」と墨書き。見返し余白の紙裏他にも「新用文章」と墨書き多数。

小泉本①には、現在、題簽がついていないが、表紙の見返しに落書き風に墨書きされた「新用文章」という文字は、当時表紙に貼られていた題簽の書名を写したものと思われる。架蔵本①のような「江戸」という角書きがあったかどうかはわからないが、少なくとも『新用文章』と記された題簽が貼られていたことだけは間違いない。この墨書きはまた、この版本が江戸で出版され、江戸の地で読まれていたことの何よりの証拠である。

両本、現物同士を子細に見比べたが、同じ版木によって刷られたものであることは間違いない。小泉本①の方が早印。紙質は、小泉本①は当時の上方版によくある薄手の楮紙。架蔵本①は、やや厚ぼったい楮紙。ともに後の典型的な江戸版によく使われる用紙ではない。

京都版の売り捌き所でない、という意味での、江戸における独自の商業出版のはじまりは、柏崎氏の研究により、伊勢国から移ってきた松会市郎兵衛による明暦前後からであるとされるが、その時期の版下のスタイルには、後の江戸版らしさはまだ現れていない。本書『〈江戸〉新用文章』は、そのような江戸における商業出版の黎明期、松会という本屋にとっても出版のはじまったまさに開業期の明暦三年に出版さ

図1

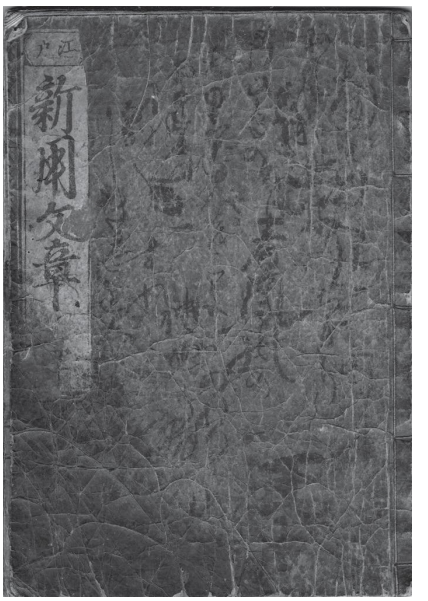


図2

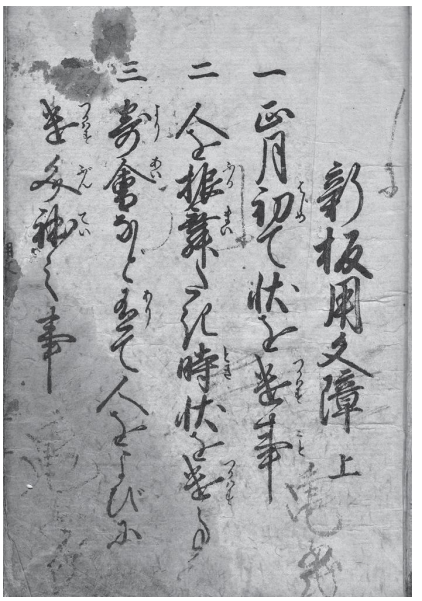


図3

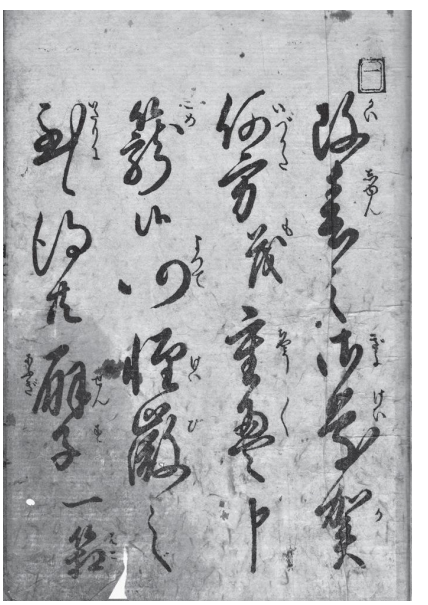
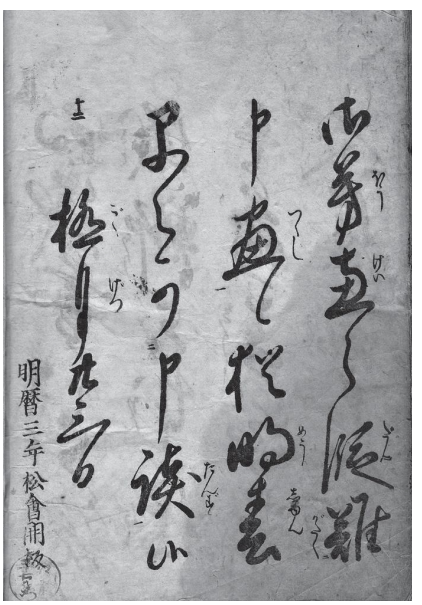


図4



れたものである。なお、柏崎氏の「松会三四郎 其二」[6]では、

ちなみに明暦三年刊『新用文章』は「松会開版」の刊記を有するが、その刊記部分は後から入木した可能性が高く、明暦三年という刊記をそのまま信用することができない本である。

との指摘がある。これは、後に述べるように、本版の覆刻の元となったものに、上方版と思われる『〈かわり〉新用文章』という版本があり、そこに明暦三年という年号を記した刊記があったのではないか、という前提に立たれた推測であろうと思われ、その可能性はきわめて高い。しかし、これもまた後で述べるように、『〈かわり〉新用文章』の伝存本については、何種かの版種がある一方で、上巻しか伝わっていなかったり、下巻があるものの、かなりの後刷のためか元々の刊記の有無自体が不明であったり、というように、肝心の刊記の状態を確認することがむつかしい状態にある。よって、厳密には、架蔵本①の落書きより、少なくとも寛文十年以前には出版されていた版本、ということしかできないのであるが、寛文ころに続々と出版された松会の刊記の体裁とは明らかに異なった刊記を備えており、元版となった上方版にあった可能性の高い「明暦三年」からそう遅れることなく覆刻出版されたものと見てよいのではないかと考えている。

ところで、この『〈江戸〉新用文章』については、当時の出版目録に記載される書目のどれにあたるのか、ということさえ、実は今一つはっきりとしていない。最も初期の出版目録の一つ、寛文六年頃刊行とされる『和漢書籍目録』の「廿一　往来物並手本」部には、「用文章」「習文章」「教文章」「都文章」「当用集」「両仮名手本」「江戸文章」「初心文章」「新用文章」「日用文章」という一連の『用文章』類が並んでいる。

では、『〈江戸〉新用文章』がこの中のどれにあたるのかといえば、題簽からは「新用文章」もしくは「江戸文章」が連想されるし、内題の「新板用文障」からは「用文章」が連想される。小泉本①に、落書き風に「新用文章」と墨書きされ、架蔵本の題簽に大きく記されているのも「新用文章」であることによれば、本来は、「新用文章」という名で呼ぶべき版本、と見るべきなのであろう。

近世初期の出版物について、最も詳細に出版状況を知ることのできるものとして、『江戸時代初期出版年表［天正十九年～明暦四年］』[7]がある。本書は、その中に、

新用文章
［刊記］明暦三年松会開版
［所蔵］母利司朗（『増補松会版書目』図版22）
…「明暦二年」の項

新用文章
［刊記］明暦三年松会開版（『増補松会版書目』図版13）
…「明暦三年」の項

と、やや情報の錯綜した形で記されているものにあたる。

同書の「凡例」を見ると、書名については、「基本的には原題箋の外題に拠っているが、外題・内題に極端に違いがあるもの、もしくは掲載書名とかなり表現の異なる別書名があるものに関しては、書名下に〈　〉に入れて示した。」とあるが、本書にかぎっていえば、たま

たま情報の拠った『増補松会版書目』に記されている書名が「新用文章」であった、ということであろう。

二　松会の出版した二種の『新用文章』

ところで、旧稿ですでに指摘したことだが、同じ松会の刊記が記された、一見、この下巻に相当すると思われるものが知られている。岡村金太郎の『往来物分類目録』（大正十一年刊）に、

新板用文障（ママ）下巻（上巻欠）　諸証文認様、義経含状等ヲ載ス。明暦頃刊歟（文中、例トシテ明暦二年ノ字アリ）。

とあるもので、岡村の記した伝本は、現在、東京大学綜合図書館が所蔵する（以下、東大本、と呼ぶ。）。

［書型］大本、下巻一冊。縦二十六・八×横一八・三糎。［表紙］改装。薄い茶色がかった灰色無地。［題簽］「新板用文障」と墨書き。後補。［内題］「新板用文障　下」。［柱刻］「用文　下二（～廿）」。所々破損して判読不能の箇所あり。［丁数］二十丁。［刊記］「松曾板」。

なお、この東大本と同板と思われるものに、小泉吉永氏蔵本（以下、小泉本②、と呼ぶ。**図5・図6**）がある。ともに下巻だけしか残っていない。

旧稿では、第一章で見た上巻だけのものと、この下巻だけのものを、一対の上下巻と考えたが、「松曾板」と刊記のある下巻は、内題の次に記された目録の漢数字が□の中に記されている点一つをとっても、先の「明暦三年松曾開板」の刊記のある上巻だけの『〈江戸〉新用文

図5

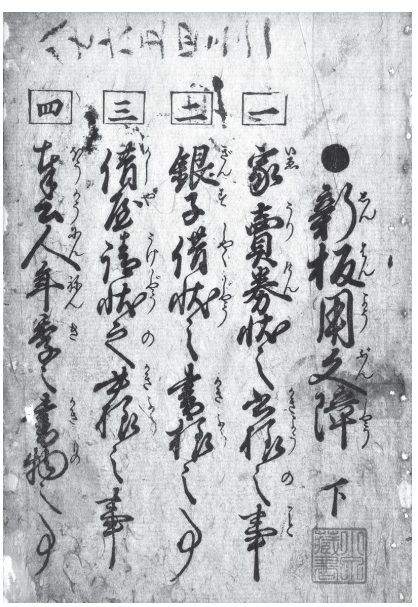
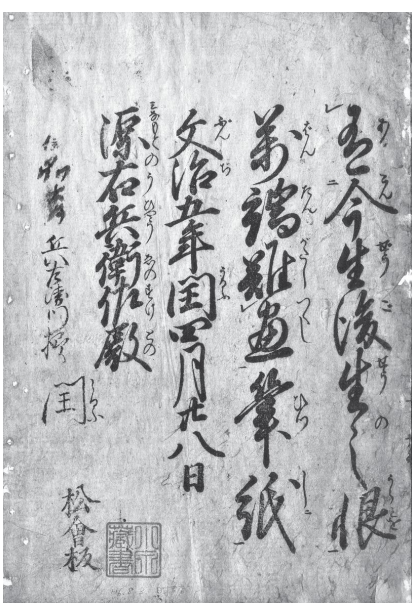


図6



章』とは、明らかに別版である。同じ松会が出版した『新用文章』にも、偶然上巻だけが残った架蔵本①・小泉本①のような版本と、これまた偶然下巻だけが残った東大本・小泉本②のような版本の、版を異にする二種類があった、ということではなかろうか。

それにしても、「新板用文障　下」と内題のあるものの末に「松曾板」という刊記があるのは良いとしても、「新板用文障　上」とあるものの末に「明暦三年松曾開板」という刊記が記されているのは不審である。これに似たものとして、『和漢朗詠集』の上巻に「松曾開板」もしくは「栃木屋清兵衛（埋木）開板」と刊記（最終丁第四十丁ウラ）のある例をあげることもできるが、この場合は、下巻末に刊記がなく、なんらかの理由で、本来下巻末に置かれるべき刊記が上巻末に置かれただけのことにすぎない。本書については、なぜこのようになっているのか、現段階ではうまく説明できないでおり、ここでは、不審であることを指摘するにとどめておきたい。

三　『新用文章』の伝本

さて、先に触れた『江戸時代初期出版年表［天正十九年～明暦四年］』によれば、明暦四年までの出版物で、この『〈江戸〉新用文章』のような、「江戸」を冠し、上方ではない「江戸」の出版であることを意識させる書名をもつ出版物は見当たらない。正体のはっきりしない出版物ではあるが、とにもかくにも、この『〈江戸〉新用文章』こそが、商業出版のはじまったばかりの江戸において、「江戸」を意識させる外見をそなえた最初の出版物である可能性が高いのである。

しかしそれでは、『〈江戸〉新用文章』は、松会が独自に出版したオリジナルな本だったのだろうか。近年の柏崎氏の研究によって、多くの江戸版は、上方の本屋との提携関係の中で、その原稿となる版本の提供を受けていたことが明らかになっている。『〈江戸〉新用文章』もまたそのように出版された可能性が高いと思われる。

旧稿においては、「〈かわり〉新用文章」という題簽をもつ、当時把握できていたただ一つの伝本である龍谷大学図書館本のようなものを元として覆刻したのが『〈江戸〉新用文章』である、と考えた。『〈かわり〉新用文章』と『〈江戸〉新用文章』には、本文の手紙文中に、明暦二年の年号があるが、後に、文中に寛文二年の年号をもつ版が作られたように、明暦二年を遡る、たとえば寛永□年という年号をもつ版があったのであり、それが『用文章』。この明暦二年を記す版が『新用文章』である、と推測してみた。あくまでも『〈かわり〉新用文章』を上方版と仮定した上での推論であった。

ところが、それから三十年近くがたち、これら広く『新用文章』と称してもよい版本には、さらに様々な異版のあることが明らかになり、旧稿のように単純には考えられないこともわかってきたのである。新たに見いだされた伝本の多くは小泉吉永氏の所蔵になるものであり、筆者も、その後、二種類の異版を見いだした。

小泉氏は、これらを「明暦板系統」と括り、それには、

（1）明暦三年・松会板（外題『〈江戸〉新用文章』）

（2）明暦頃・松会板異板

（3）明暦頃刊異板（少なくとも三種。うち一本の外題は『〈かわり〉新板用文章』）
（4）万治三年・山本板
（5）寛文六年・秋田屋板（外題『新板用文章』）
（6）江戸前期刊『〈新判〉新用字尽』（『往来物解題辞典』）

の八種があると指摘されている。[8] 第一章で見た上巻だけの伝存する版種が（1）、第二章で見た下巻だけの伝存する版種が（2）にあたる。どちらにも松会の刊記があり、江戸での出版であることは間違いない。

本稿で問題とするのは、（1）（2）（3）相互の関係である。ともに松会の出版した（1）と（2）は、別版であることがすでに明らかになっている。残る問題は、（1）（2）の『〈江戸〉新用文章』と（3）の『〈かわり〉新用文章』との関係である。はたして（3）は、本当に（1）（2）の元版なのか。また、（3）は上方版なのか、という問題である。

旧稿を記したさいに『〈かわり〉新用文章』の伝本として確認できたものは、わずかに龍谷大学図書館蔵本の一本だけであった。現在は、『〈かわり〉新用文章』という題簽を付けたものだけでも次の二点（小泉本③④）がみつかっている。

小泉本③（**図7・図8**）

［書型］大本　上巻一冊。縦二十五・六×横一八・二糎。［表紙］黒色卍繋地牡丹文。［題簽］「〈かわり〉新用文章（下部欠）」。［内題］「新板用文障　上」。［柱刻］「用文　上一（～廿四終）」。［丁数］二十四丁。［刊記］なし。

小泉本④（**図9・図10**）

［書型］大本　上巻一冊。縦二十四・〇×横一八・二糎。［表紙］縹色無地。［題簽］「〈かわ□〉新用文章　上」。［内題］「新板用文障　上」。［柱刻］「用文　上一（～十六）」。十七丁以下欠。［丁数］十六丁。［刊記］なし。

また、『〈江戸〉新用文章』か『〈かわり〉新用文章』の板木を用いてかなり後に出版された『男用文章大成』という題簽をもつ一冊本（上下揃い）（以下、小泉本⑤、と呼ぶ。）、

［書型］大本　上下巻一冊。縦二十五・五×横一八・六糎。［表紙］縹色無地。［題簽］「男用文章大成」。［内題］なし。目録なし。［柱刻］「用文　上二（ママ）（～廿四終）」、「下二（～十七）」。「板行目録」「丁数」三十九丁。［刊記］巻末に「京都書林　寺町通三条上ル町北ノ角　菊屋安兵衛」の広告一丁。ウラ表紙見返しに、「書肆　□□町　絹屋□兵衛」とかろうじて判読できる半丁

および、『新用文章』類の伝存本の中で、万治から延宝頃のいわゆる「江戸版」に特徴的な紙（毛羽立ち、わずかながら髪の混入もあり）に刷られた唯一の伝本（以下、小泉本⑥、と呼ぶ。）も比較検討の対象に加えた。

［書型］大本　上巻一冊。縦二十七・三×横一九・〇糎。［表紙］黒色卍繋地牡丹文。ただし表皮ほとんど剥落。［題簽］なし。［内題］「新板用文障　上」。［柱刻］「用文　上一（～廿四終）」。第十二丁、第二十四丁欠。［丁数］二十二丁。［刊記］なし。

（4）の万治三年刊山本九左衛門版（下巻のみ。架蔵本）は、明暦三年に出版された松会版についで刊年を明記した重要な版種である

図7

図8

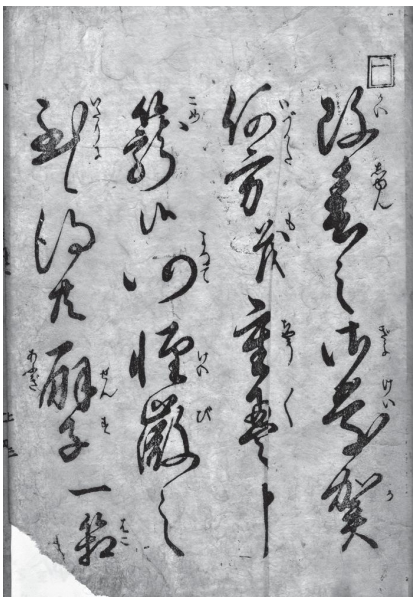
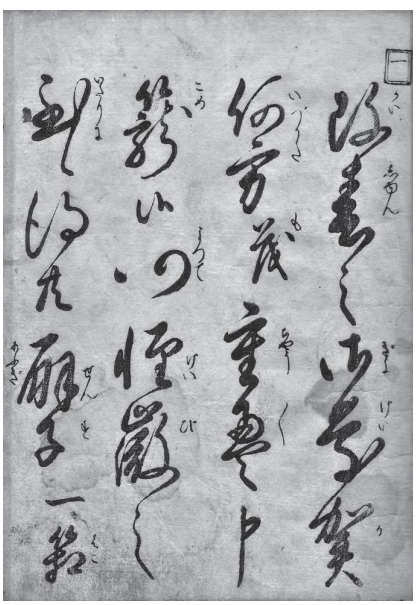


図9

図10



が、（1）（2）（3）の間に見られる、覆刻か同板か、を問題にするようなきわめて似通った版式とは明らかに異なっており、くわえて、下巻だけしか伝存していない。よって今回の比較検討の対象から外した。

四　比較の結果

別表は、以上のいわゆる『新用文章』の各種伝本について、刷りの状態によって微妙に異なってしまう文字の抑揚や線の太さなどを除き、明らかに本文（フリガナも含む）自体に異なりのある十一箇所について、その異同を一覧したものである。

ご覧のように、『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）と酷似しているのは三本あった。

一つは、題簽を欠き外題を明らかにしない小泉本①。第一章で触れたように、『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）と同じ板木によって刷られた伝本であり、当然の結果であった。異同項目2の「十二　極月十一日」の「十二」が欠けているが、刷りの状態によってたまたま欠けてしまったものと思われる。

あと二つは、旧稿で指摘していた龍大本と、今回あらたに判明した、同版で、『〈かわり〉新用文章』の題簽をもつ小泉本④である。後者は、残念ながら、第十七丁目以下を欠き、異同項目の7から11の箇所が同じかどうかを確かめることができないのだが、1から6までの項目がすべて一致していることはやはり無視できない。

『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）と『〈かわり〉新用文章』のうちの龍大本・小泉本④は、子細に比べると、線や字形にわずかに異なりが認められ、同じ板木によって刷られたものではない。以上のことから考えれば、『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）と、『〈かわり〉新用文章』のうちの龍大本・小泉本④は、どちらかが元版で、どちらかがそれを忠実に覆刻した関係にある、と見てよいのだと思われる。

では、どちらが元版で、どちらが覆刻版なのだろうか。元版と覆刻版を区別する一つの目安として、覆刻版の字高が元版の字高より短くなる、という現象のあることが指摘されている。[9] そこで、試みに、『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）と『〈かわり〉新用文章』のうちの小泉本④、それぞれの第三丁から五丁までの三丁分について字高を計ってみた。

第三丁表2行目

『〈かわり〉新用文章』（小泉本④）…二十・六糎

『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）…二十・四糎

第四丁表2行目

『〈かわり〉新用文章』（小泉本④）…二十・三糎

『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）…二十・〇糎

第五丁表2行目

『〈かわり〉新用文章』（小泉本④）…二十・五糎

『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）…二十・三糎

わずかではあるが、『〈かわり〉新用文章』（小泉本④）の方が『〈江戸〉新用文章』（架蔵本①）より若干字高の長いことがわかった。

旧稿では、龍谷大学本『〈かわり〉新用文章』との比較によって、『〈江

	『〈江戸〉新用文章』架蔵本①	『〈江戸〉新用文章』小泉本①	『〈かわり〉新用文章』龍谷大本	『〈かわり〉新用文章』小泉本③	『〈かわり〉新用文章』小泉本④	『男用文章大成』小泉本⑤	逸題本　江戸版　小泉本⑥
1 三丁裏4行目	正―孟春二日	正―孟春二日	□（摩滅）― 孟春二日	孟春二日	正―孟春二日	正―孟春二日	正―孟春二日
2 五丁裏4行目	十二極月十一日	極月十一日	□（摩滅） 極月十一日	極月十一日	十二極月十一日	十二極月十一日	極月十一日
3 七丁裏2行目	依二雖レ為二いへども たりと	依二雖レ為二いへども たりと	依二雖レ為二いへども たりと	依 雖レ為二いへども たりと	依二雖レ為二いへども たりと	依二雖レ為二いへども たりと	依一雖レ為二いへども たりと
4 八丁表4行目	六―林鐘廿八日	六―林鐘廿八日	六―林鐘廿八日	林鐘廿八日	六―林鐘廿八日	六―林鐘廿八日	林鐘廿八日
5 十丁表3行目	一入	一入	一入	一入	一入	一入	一入
6 十一丁表1行目	澤卓山散	澤卓山散	澤卓山散	澤山	澤卓山散	澤卓山散	澤卓山散
7 十九丁表1行目	急用	急用	急用	急用		急（摩滅）用	急用
8 十九丁裏4行目	可レ被レ成候	可レ被レ成候	可被成候	可レ被レ成候		可被成候	可被成候
9 廿丁表4行目	如レ此候	如レ此候	如レ此候	如レ此候		如レ此の候	如レ此候
10 廿一丁表2行目	涯分	涯分	涯分	涯分		涯分	涯分
11 廿二丁表3行目	神事	神事	神事	神事		神（摩滅）事	神事

戸〉新用文章』は『〈かわり〉新用文章』を覆刻出版したもの、と単純に指摘した。結果的に、今回の調査によっても大きな見当違いではなかったことがわかったが、新たに『〈かわり〉新用文章』の伝本を複数見ることができたことによって、その中で比較的流布したのではないかと思われる龍大本・小泉本④の版種の『かわり／新用文章』こそが、『〈江戸〉新用文章』の元版であることが確証できた。『〈かわり〉新用文章』自体にも、多くの覆刻がおこなわれていたのである。

残念ながら、龍大本・小泉本④の『〈かわり〉新用文章』が上方版であるかどうかを判断する手がかりはほとんどないが、当時の上方版と江戸版の関係から考えて、上方で流布していた『〈かわり〉新用文章』（龍大本・小泉本④）を元に、〈かわり〉という角書を〈江戸〉に改め、江戸の松会が覆刻して出版したものが『〈江戸〉新用文章』という版本なのであろう。

五　おわりに
―『〈江戸〉新用文章』の〈江戸〉意識―

『〈江戸〉新用文章』と同じように、明暦頃、上方版を元として江戸の本屋が覆刻出版した往来物の例に、『人倫名』（承応三年刊。渡邊守邦氏蔵本・母利本は互いに覆刻関係）という往来物がある。拙稿「古版往来物における〈合冊再刊〉について」[10]で指摘したように、これには版元不明ながら、いかにも江戸版らしい版下をそなえた明暦二年刊覆刻版がある。江戸版の版下を作った筆工は、上方版の文字を透き写して版下を書いていくさい、文字の線の抑揚を強調し、運筆を過剰なまでに変えながら上方版の書風を変えていったたふしがある。

しかし、この『〈江戸〉新用文章』にはいまだそのような書風の変化は認められず、『〈かわり〉新用文章』の書風を写し取っていく忠実さだけが認められる。ただ、松会はそこにひとつだけ新しい試みを設けていた。『〈かわり〉新用文章』の角書である「かわり」を、「江戸」に改めたことである。

繰り返し言うように、地理的な意味で江戸のことを記した作品は除き、明暦ころまでの版本で、作品内容と関わりなく書名の一部に「江戸」を称したのは、本書がはじめての試みであったろう。明暦年間は、江戸の本屋が、いまだ上方の本屋の強い影響下にあった時代である。その中から、先の『人倫名』を出版した本屋のように、少しずつ、独自に上方離れを試みる動きもはじまりつつあったのである。『〈江戸〉新用文章』の「江戸」もまた、まさにそのはじまりの象徴なのであった。

注

（1）『一橋論叢』第百三十四巻第四号・平成十七年刊。
（2）『人文・自然研究』第一巻・同二十年刊。
（3）『京都府立大学学術報告（人文）』第六十四号・同二十四年刊。
（4）『和漢語文研究』第十三号・同二十七年刊。
（5）『岐阜大学国語国文学』第二十号・同三年刊。
（6）『言語文化』第四十五号・同二十年刊。
（7）岡雅彦他編・同二十三年刊・勉誠出版

（8）往来物倶楽部HP「往来物データベース」
http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/indexB.htm
（9）木村三四吾「俳諧七部集初版本考（一、『冬の日』）」（『ビブリア』第四十六号・昭和四十五年刊）。
（10）『東海近世』第十五号・平成十七年刊。

付記

本稿は、平成三十年度JSPS学術研究助成基金助成金による課題研究「近世前期江戸出版界における〈江戸〉意識の萌芽についての研究」（基盤研究C・18K00321）による研究成果の一部である。小泉吉永氏には御所蔵本の閲覧、また写真掲載の許可にいたるまで多大なご厚情にあずかった。また龍谷大学図書館には所蔵資料の複製写真をいただいた。ともに厚く御礼申し上げる。

（二〇一八年七月十日受理）

（もり　しろう　文学部日本・中国文学科教授）